

デュポン社からナイロン製造技術を導入

戦前の日本では生糸が高級衣料用の原料として対米輸出の重要部分を占めていた。しかし戦争中に、世界初の合成繊維であるナイロンを米国のデュポン社が開発した（1935年、化学者ウォレス・カロザースによる）。米国では、1945年には婦人用靴下の80%が生糸製だったが、1950年にはナイロンに取って代わられた。

日本の繊維企業にとって、天然繊維の生糸から合成繊維のナイロンに転換することは必至だった。

東レが1951年、デュポン社とナイロンの製造技術のライセンス契約を結ぶ¹

- ライセンス料：頭金10.8億円＋年間生産高500万（重量）ポンドまでは売上高の3%のロイアルティ
 - ◇ ロイアルティ royalty：技術使用料（技術の使用を認可されることへの対価）{印税}
 - ◇ 当時の東レの資本金 7.5億円
- 最初の2年は赤字。1953年前期に利益5億円。その後も増加。
- 第2のメーカーが参入した1955年までに、巨額の技術導入投資を回収した。
- 第3メーカーの参入（1963年）まではナイロン部門の売上高利益率は10%以上。

東レのナイロン技術導入²

- 1951-55年に政府は東レだけにナイロン技術の導入を認可した。
- →東レは開発努力に対する収益を確保し、莫大な独占利潤を享受した。

技術導入は、1968年までは個別の政府承認を必要とした³

技術の選択、企業の選択、導入条件の有利化などについて政府が支援をした。

具体例：デュポンからのナイロン技術の導入

- 新しい繊維産業は重要産業だった。輸出産業となる可能性があった。
- 東レは以前から、ナイロンに関する実験を重ねていた実績があった。

¹ 後藤晃（2000）『イノベーションと日本経済』岩波新書、82頁。

² 後藤（2000）93頁。

³ 後藤（2000）86-87頁。